

静内町マガン越冬観察記録

(DATE:1995.12.29~2003.2.24)

日本白鳥の会会員

日本雁を保護する会会員

北海道静内郡静内町中野町2丁目6番38号

谷岡 隆

(<http://tanioka.info> ~ 最北のマガン越冬地・静内)

はじめに

平成7年2月5日、この年の北帰行第一団と思われるマガン27羽が、何の前触れもなく静内町神森地区に渡来、3月9日までの間、渡りの中継地として約一カ月間を過ごした。そして、平成7年12月22日~平成8年3月24日までの93日間、天然記念物・マガン41羽とヒシクイ1羽の計42羽が北海道静内町で初めて越冬した。

次なる関心事は越冬2シーズン目に継続するかであったが、平成8年12月29日、マガン28羽が1シーズン目と同じA地区に渡来し越冬。これとは別行動のマガン幼鳥2羽も1月15日~4月25日間、町内B地区で越冬した。

以後、現在では越冬開始後、8シーズン目を経過したが、越冬期間、越冬数、採食、ねぐら、行動パターン等から静内町での越冬は完全に定着したといえる。

行動パターンは、毎年11月~12月に渡来し、2月下旬に渡去、越冬期間はその年の気候、採食環境、群れ数等により変化するが、期間は約50~90日。採食については、牧草地での牧草を主食とする。本州でのマガンが殆ど水田で落穂、しいな、モミワラなど米系統を食するのに対し、静内町では水田、落穂等が豊富であるにも関わらず、サラブレッドの放牧地、採草地等の牧草と休耕田、水田あぜ道の雑草等を食している。

毎日の生活パターンは、日の出と同時に牧草地へと向かい採食を開始、日の入りまでの間、絶えず採食行動を繰り返す。時には水を飲む、休眠等の行動もあるが、一日の大半を採食行動に費やすといっても過言ではない。

ねぐらについては、1シーズン目から静内川中流域の中洲を使用し、8シーズン目を終了した現在、多少の場所の移動はあるものの基本的には変更ない。他のマガン越冬地では多くが湖沼をねぐらとして利用するが、静内町では天然の湖沼はないため、静内川を使用している。

北海道でねぐらを川に求めた場合、多くの河川は寒さにより冬期間は結氷してしまうが、道南に位置し温暖な気候である静内町にある静内川では、結氷することは殆どないため、幸いねぐらとして使うことが可能となっている。

越冬に必要なもう一つの要素である餌の確保(採食)についても、ねぐら同様、温暖な気候であるため、降雪が少なく積雪がほとんどない環境下となっている。また、国内を代表するサラブレッドの生産地でも

あることから、農村部の土地利用は殆どが牧草地帯となっており、1月中旬頃から牧草の新芽が発育、いたる所で採食活動が可能となるため、採食に関しては、質・量共に心配はない。

北海道でのマガン越冬は、従来は不可能というか考えられず、事実、その例もなかった。しかし、このように越冬に必要な最低条件となるねぐら及び採食物が温暖な気候により確保されているため、連続し8シーズンを数えるに至っている。

以下、その概要につき、項目別にまとめてみた。

越冬期間・個体数

1シーズン目 / 平成7年12月22日～平成8年3月24日(93日間)

42羽(マガン41羽、ヒシクイ1羽)

2シーズン目 / 平成8年12月29日～平成9年2月23日(57日間)

28羽(マガン28羽)

3シーズン目 / 平成10年1月6日～平成10年2月22日(48日間)

34羽(マガン33羽、シジュウカラガン1羽)

4シーズン目 / 平成10年12月28日～平成11年2月25日(60日間)

48羽(マガン47羽、ヒシクイ1羽)

5シーズン目 / 平成11年12月21日～平成12年3月22日(93日間)

68羽(マガン63羽、シジュウカラガン4羽、ハクガン1羽)

6シーズン目 / 平成12年12月13日～平成13年2月22日(55日間)

54羽(マガン52羽、ヒシクイ1羽、ハクガン1羽)

7シーズン目 / 平成13年11月29日～平成14年2月22日(87日間)

126羽(マガン125羽、ヒメシジュウカラガン1羽)

平均値 / 越冬群数～57羽、越冬期間日～70日

8シーズン目 / 平成14年12月17日～平成15年2月24日(70日間)

113羽(マガン113羽)

平均値 / 越冬群数～64.12羽、越冬期間～70.37日

ねぐら

越冬当初の数年間、日没後の暗闇の中をマガンたちがねぐらと思われる静内川上流方向へと飛んで行く光景を見続けてきたが、飛んで行く方向、距離等から判断しおおよその見当はついていたものの確定には至らなかった。しかし、越冬4年目となる平成10年2月21日、遂にねぐらを発見した。

場所は従来からの推定箇所であった静内川中流域で、片側が地続きの中州。周辺は砂利原が続くいたってシンプルな地形。特徴的な事は次のとおり。

ねぐらの面積は、想像以上に狭く、20m四方以内。

マガンだけではなく、マガモ、コガモ、オナガガモなどのカモ約百羽もここをねぐらしており、多くの水鳥が集結した状態になっている。

キタキツネのねぐらが近辺にあり、ねぐら付近にも随分とキタキツネの新しい足跡も結構ある。その意味では環境が優れているとは言い難いが、直ぐ近くの対岸にも河原が有り避難する事が出来るため、それなりに条件が整っている。

河原ではあるが、両岸に柳が密生しており、最低限、風の影響を受けづらく、防風林の役目を果たしている。

辺りは見晴らしが良く、天敵などから身を守るためのロケーションに優れている。

採食

基本パターン

早朝の日の出と共に、静内川のねぐらから採食地へと向かい、一日中、採食行動をし、日没と同時にねぐらへと帰る。一日の行動は、群れ全体での統一行動である。ねぐらと採食地との距離は数キロ程度と推定される。

行動

早朝は、まどろみ状態が続くも、午前9時以降から活発な採食活動に移り、お昼頃に休眠を取り、午後からまた、採食をし、一日の大半を採食行動に費やすと言っても過言ではない。また、日没1時間前頃からは採食活動が活発になる。

採食物は12月～2月が牧草、3月に入ると稲藁・落ち穂等の米系統に移行する。これは、渡り時期に必要なカロリーと関係し、渡りが近くなるとカロリーの高い米系統を食する。しかし、ここ数年は2月下旬に採食地を静内町から鶴川町へと移動してしまうので、詳しいことは不明ではあるが何度か確認した際は、全て鶴川町での採食物は水田での米系統であった。

水分補給は、餌の周辺ある雪や融雪した水を飲む場合がほとんどであるが、越冬1～2シーズンは静内川の中洲に降り川の水を飲むケースも何度か見られた。

採食地

静内町での採食地は、シーズン毎に場所を移動させているが、マガンが採食地として選ぶのには幾つかの条件があるように思える。以下はその特徴的な事項。

サラブレッドの放牧地、採草地など牧草が豊富にある場所。

周辺に障害物がなく、平坦な土地で見通しがきく場所。これは、人間、キツネ、犬などの動物から身を守るために安全な環境を選定している理由と思われる。

採食地の近くに道路、人家、馬の厩舎等の有無に関係なく、むしろこれらの建物等があり、人が住む環境下の場所の方が多い。

当然のことながら牧草がある場所はサラブレッドが放牧されている場合が多いが、双方共に争いあうなどの事例は皆無で、共生している。

1～2シーズンは市街地に隣接した牧場・牧草地。3～5シーズンは海岸線近くの牧場・牧草地。6～8シーズンは、市街地より5～6km奥の牧場・牧草地と数年単位で移動をしている。

採食地移動の理由は、マガンにいたずらをする、追い払う等の全て人間が関わりを持つ人為的なものに起因し、移動を余儀なくされている。

シーズン別特徴

1シーズン目

平成7年12月22日～平成8年3月24日までの93日間、天然記念物・マガン41羽とヒシクイ1羽の計42羽が北海道静内町で初めて越冬した。越冬数は、3月に入り多少の変動はあるが基本的にマガン41羽、ヒシクイ1羽の合計42羽。

一シーズン目に観察、判明した主な事象は次のとおりであるが、以後、8シーズンまでこれらのことは基本的に変わってはいない。

採食地は、静内町市街地に隣接した牧草地で、JRA場外馬券発売所が近くにある。また、道路の直ぐ側にあるため、車、人の往来が激しい場所。

採食地とねぐらは別々の場所。

行動時間は、夜明けから日没までの日照時間内。

採食場所は牧草地と水田で、行動範囲も直径 1.8 km以内と意外と狭い。

採食物は2月まで牧草で、3月からは落穂等の米系統。

マガンの一日行動は、その大半を採食に費やす。

積雪が少ないため、採食活動で不自由することはない。

サラブレッドと一緒に牧草を採食するが、共に違和感がなく争いごともない。

採食を含め行動は全て群れ単位で行い、統一されている。

人への警戒心があまりない。

なお、初越冬前の平成7年2月5日～3月9日の約1か月間、マガン27羽が静内A地区に渡来、渡りの中継点として約一カ月を過ごした。マガンの土地の執着心が強い習性と、採食地も昨年とほぼ同一場所であることから、同じ群れである確率が高い。

2 シーズン目

注目のマガン越冬が継続するかであったが、平成8年12月29日、マガン28羽が1シーズン目と同じA地区に渡来し越冬。これとは別行動のマガン幼鳥2羽も、1月15日から町内C地区で確認され越冬した。

2シーズン目の特徴は、前年と比較し個体数、行動パターンが大きく異なった事で28羽は、前年越冬地・A地区には定着せず、A地区での確認は12月29日～1月5日、2月1日～12日、2月22日～23日と間隔があき、僅か22日間にとどまった。

これは、前シーズン採食地であるA地区で、カメラマンがむやみに接近する、飼い犬を放すなどによるマガンへの生息環境悪化により、やむなく他の場所に移動せざるを得ず、外の採食地へと移動し越冬した。

一方、この群れとは別に幼鳥2羽が、A地区から6km離れた場所で、競走馬の放牧地を採食地とし、1月15日～4月25日までの101日もの長期間にわたり半径500mの小さな行動範囲の中で越冬した。

幼鳥2羽の行動は別行動で、2月22日に一度28羽の群れと合流した以外は、一度も行動を共にせず、行動範囲も田原地区の牧場と静内川河川敷地間500mを往来するという独自の行動を続けた。2羽とも嘴の先端が黒ずんでおり、これは幼鳥期の特徴の一つで、発育状態が良くない症状の一つである。

3 シーズン目

これまでの採食地であるA地区には不定期に渡来するのみで、採食地としては不相当と判断したのか、殆ど確認することが出来ず、また、隣接町の新冠町、三石町の放牧地、採草地等を捜し回ったが、結局、採食地がどこに移動したのかということも確認出来ずに、不本意なシーズンとなった。

要因として考えられるのは、A地区は市街地に隣接する都市計画区域であることから、人の往来も多く、マガンに近づき写真をとる、石を投げるなどのいたづらをする、飼い犬を放す等、住民のマガンへの理解、認識不足から生じる妨害行為が重なったものと思われる。

しかし、マガンの静内町渡来日と同日である1月6日、シジュウカラガン標識鳥(069)1羽が静内川に飛来し、3月24日までの78日間、北海道で初めて越冬した。このシジュウカラガンは、日本雁を保護する会が人工養殖し、北方領土近くのエカルマ島で、前年8月に放鳥したもので静内町の一羽と

併せて東北でも二羽が越冬し、計三羽が国内で越冬した。

なお、シジュウカラガンはマガンの群れ33羽と同一行動で静内町に渡来した可能性もあるが、その後、マガン群れとは別行動であった。

4 シーズン目

4シーズン目も従来の採食地・A地区には定着せず、A地区での確認は僅か11日間に止どまった。それ以外の採食場所が不明となっていたが、今シーズンになり新採食地としてD地区を発見、しかも、この地には越冬2シーズン、3シーズンにわたり採食地として生息していたことが判明した。

越冬4年目は、マガンの群れとしては過去最高の46羽(成鳥28羽・幼鳥18羽)が越冬したが、それ以外にも町内数か所に行動範囲を広げた。しかし、2シーズン目までの採食地であるA地区には1月27日以外に地上で採食するのを確認出来ず、僅かに数日間、上空を通過する以外に群れを確認出来なかった。

この群れとは別にオオハクチョウと行動を共にするヒシクイ1羽・マガン1羽、計2羽の幼鳥2羽が新冠川をねぐらに新冠町と静内町を往来し、渡来日と旅立日は異なるものの大半の日々を共に行動し、今年も従来とは違う越冬パターンとなった。

一昨年(2シーズン)以降の越冬で最も気になることは、心無いアマチュアカメラマン、知識を持つ、持たないに関係のないバードウォッチャーなど、人為的な要素に起因し、人間に対してマガンが非常に警戒心を持つようになり、人とマガンとの信頼関係が希薄となってきていることである。

結果、マガンが採食地を変更せざるを得なくなり、事実、毎年、変化している。これをどのように関係を修復、絆を深める事が出来るかが今後の大きな課題である。

5 シーズン目

例年より2か月早い10月23日、マガン幼鳥1羽が静内町内のC地区の小沼に突然現れ、10日間の短期間ではあったが姿を見せた。

また、静内町から50km東に位置する浦河町でも初めてマガンが確認され、浦河郡浦河町東幌別、東ライベツ川におき、11月15日から12月1日まで17日間、マガン幼鳥2羽が約80羽のカモ達一緒に生息した。

更に、この2羽はその後、様似町、様似川へとねぐらを移し3月13日までの間、越冬し浦河町と様似町で初めてマガンが越冬した。このように今シーズンは、マガン幼鳥が例年より早い時期から姿を見せている。マガン越冬5シーズン目となるが、今シーズンは極めて話題の多いシーズン。

68羽の雁たちが93日間にわたり越冬し、過去最高であった昨シーズン(4シーズン目の46羽を22羽も上回った。

3種類のガンが越冬、これまでに越冬したマガン、ヒシクイ、シジュウカラガン(首標識鳥:069)に加え、越冬数が国内で5羽前後のハクガン(オオハクガンと思われる)が加わり、なおかつ危急種(絶滅の危険が増大している種)で国内での越冬が毎年数羽程度のシジュウカラガンが4羽も越冬するなど、話題が多く興味深いシーズンとなった。

静内で越冬した群れが3月4日~5日、3月12日の二度にわたり、静内から約60km離れた鶴川町まで移動、再び静内町へと戻って来たのが確認された。

苫小牧市でもウトナイ湖をねぐらとしたヒシクイ5羽が越冬し、静内町以外の越冬地として様似町(浦河町)と共に、少数とはいえ北海道で3箇所も雁が越冬した。

6 シーズン目

越冬6年目は、全国的に寒波が襲いとにかく寒い冬となり、静内町でも、例年では寒気が緩む2月10日以降もマイナス10度以上の気温を連続記録するなど、厳しい寒さと向き合う年となった。この寒気の中、越冬したガン類は、今までになく群れの不規則な行動が目立ち、従来の越冬パターンとは大きく異なった。

群れ全体の動向については、本群（本隊）が例年より約二週間早い12月13日に静内町内へと姿を現したものの12月28日には静内町より鶴川町へと越冬場所を移動し、1月16日に再び静内町へと姿を現すまでの20日間、静内不在となった。

このようなシーズン途中で他の町への移動はこれまでの5シーズン中、一度もなかったが、原因は寒さと例年より多かった降雪により、牧草の新芽も芽がでるのが遅くなるなど、採食物が不足した結果によるもので、今シーズンの寒気と密接な関係があったと考えられる。

また、期間のズレはあるものの、シーズン当初より本群としてマガン52羽とシジュウカラガン1羽の53羽、2羽の小群としてオオヒシクイとマガン。更に2月6日以降はハクガンも加わり、併せて4種類のガンが越冬した。中でもオオヒシクイは静内町では昨シーズンまで越冬例がなく、今シーズンが初めての越冬記録となった。

なお、静内越冬以降の行動については、ハクガン、シジュウカラガンなど全ての個体がそのまま鶴川町へと移動し、暫くはここで採食を続け、ねぐらをウトナイ湖に求めて寄留した。

7シーズン目

マガンが北海道で越冬を開始してから7シーズン目となるが、今シーズンは昨年越冬数の二倍以上となる122羽が越冬、静内町でのマガン越冬数が7シーズンで初めて100羽を越えた。

例年、希少種ガンが越冬することも嬉しいが、これまで年数を重ねても越冬数が中々、増えていかなかった状況の中で、越冬数増加は何よりも嬉しい事象となった。

これに連動するように胆振支庁管内・鶴川町水田でも10羽（成鳥3羽、幼鳥7羽）が初めて越冬した。今後、静内町での越冬組が、今まで以上に鶴川町とは越冬行動範囲の地域的な結びつきが強まってくることが予想されるが、2月6日以降、静内町での越冬群れが60km離れた鶴川町との往来が活発に確認された。

この行動は例年であれば2月中旬か3月に入ってからのものであり、温暖であった今冬、気温が上昇する等の環境変化に敏感なマガンがいち早く察知し、これに呼応するかのようにはマガン行動が例年より約2～3週間早く、鶴川町へと移動する前に見せるパフォーマンスとなって現れ、年々、静内町・鶴川町間を往来するケースが繁盛になっており、今後も活発化すると思われる。

今シーズンの特徴的な事項を何点か記載する。

採食場所がC地区と隣接するE地区を往来し、前半はC地区、後半はE地区となったこと。

昨シーズンまでは一団となり群れが移動してきたが、今シーズンは12月5日～50羽、12月6日～75羽、12月8日～89羽、12月9日～122羽と越冬開始時期に幾つかの群れに分かれて静内町へと移動するなど、数日間に分かれて移動してきた。移動元は苫小牧市にあるウトナイ湖で、ここでの個体数減がそのまま静内町での個体数増と連動していることから結論づけられ、この傾向はここ数年、継続しており、こられのことから定着したといつてよい。

越冬終了期日の固定化で、1995年以降の静内町でのマガン越冬期間を精査すると、複数に分かれて群れが越冬したシーズンが多いため、全ての群れという表記にはならないが、主たる群れの越冬終了期間が2月22日前後に集中しており、7シーズン中、今シーズンを含めて2月22日で終了したのが3シーズン。2月23日が1シーズン、2月25日も1シーズンとなっており、5シーズンが2月22日の前後3日間に集中していることから、マガン越冬パターンも固定化の傾向にあることが伺われる。

また、越冬開始期日については、5シーズン目までは12月25日前後であったが、昨シーズンが

12月13日、今シーズンは11月29日と、ここ2シーズンは越冬開始日が年々と早まっており、来シーズンの渡来日が注目される。

国内での確認されることが僅か数例というヒメシジュウカラガンが北海道で初越冬し、貴重な越冬例となったことも嬉しいことの一つとなったことである。

ヒメシジュウカラガンは、アラスカ沿岸部で繁殖、アメリカ西海岸で越冬するが、個体数が世界で27万3千羽(2000~2001年度)しかおらず、8種類いるカナダガン(シジュウカラガン)の中で最も体が小さく、ガンの種類の中では個体数も少ない方に属し、日本には極まれにしか渡来しない。

記録としては1979年10月~1980年3月、宮城県伊豆沼で国内では初めて1羽が越冬。5~6年前、新潟県、信濃川流域である大河津分水(分水町・寺泊町)で1羽を確認、昨シーズンの2000~2001年度、10月14日~11月12日間、宮城県伊豆沼周辺で1羽が確認されているなどに留まり、データとして存在するのはごく僅かに過ぎない。

8シーズン目

越冬8年目となる今シーズンは、12月は温暖だったものの1~2月は気温が下がり、越冬6シーズン目、2月10日以降になってもマイナス10度以上の気温を連続して記録する程の寒さではなかったものの、総じて寒い冬となった。

しかし、10月~12月は比較的温暖であったため、秋になっても餌となる牧草が青々しており、例年になく採食環境が整った結果、1月初旬までマガンが丸々と太っており、糞の大きさも通常のものより数割程度太く長く、降雪量もそこそこで収まったため、採食条件に恵まれたシーズンとなった。

この寒気の中、越冬したガン類は越冬個体数113羽で、昨シーズン126羽と同様、連続して100羽を超えたが、ハクガン、シジュウカラガンなどの希少種は一羽も含まれず全羽がマガンであったが、100羽を超えると個体数の確認作業は困難を極め、マガンが低い姿勢で採食し、かならず数羽が重なる。絶えず移動しながらの採食となり、一箇所に固定しない。大抵の地表には凹凸があるため窪地で採食するマガンが見えづらい。などの悪条件が重なるため、双眼鏡やプロミナーでは殆ど不可能という事態となった。最も確実な確認方法は、写真撮影による確認方法で、それも全羽が揃った空中に限定されるが、これも個体が重なる等の難題があり、5~6枚撮影しても全てが違う数となるなど、困難を極めた。

越冬当初、何回かに分かれて静内町へと渡って来る。越冬シーズン中、鶴川町との間を往来するなど、従来の越冬パターンと同じ行動をとったが、特徴的なことは次のとおり。

採食場所がC地区とA地区を往来し、前半はC地区、後半がA地区となった。

2月24日、静内町から姿を見せなくなったものの、3月2日~6日の5日間、再び静内町へと舞い戻り採食活動を続けるなど、従来とは違った新しい行動パターンを見せた。

昨シーズンに続き、越冬数が連続して100羽を超えた。

初めて越冬した1995年から8シーズン目を数え、静内町でのマガン越冬が完全に定着した。

また、昨シーズン鶴川町で10羽が初めて越冬し、今シーズンも同様の行動をとるのかと思われたが、予想に反し、鶴川町での越冬は一羽も確認出来なかった。しかし、鶴川町と同じ胆振支庁管内の伊達市で1998年(平成9年)秋より、数羽から数十羽と越冬個体数は少ないものの今年も5シーズン連続して越冬していることが判明し、その数も年々、増加しているおり、今シーズンは12月22日現在、58羽が確認、そのまま越冬した。

北海道内で静内町以外にも越冬している場所があることが分かったことは、地球温暖化現象に起因したマガン越冬事例が一つ増えたこととなるので、大変嬉しい事象である。

地球温暖化

マガンの国内越冬数の約8割が越冬する最大越冬地“伊豆沼”が一局集中の形となっており、物理的にも飽和状態であるとされている。ならば、新天地を求め北海道で越冬しても不思議で

はないと考えられるが、低い気温、ねぐらとなる河川や湖沼の結氷、生息には不可欠な草・米等、餌の確保が困難であるなど、生息条件が厳しい事から、マガンの越冬には不適とされ、誰もが予想だにできなかった。

しかし、北海道での越冬は既に8シーズンを終了した。では、どうしてマガンが越冬するようになったのか。あれこれ考えられる諸説を消去法で落としていくと、最後に残るのが「地球温暖化」説で、理論的にも裏づけされている。

マガンは、1940年代には推定50,000羽以上が生息していたにもかかわらず、以後、国内での生息環境の悪化などが原因で、年々、個体数は減少していった。

10数年前から増加現象が始まり、越冬地の北限とされる宮城県北部・伊豆沼での越冬数が、1970年代は3000~4000羽台であったものが、1985年冬に10,000羽を越えたあたりから増加に拍車がかかり、1990年以降は20,000~30,000羽。そして1996年には、ついに50,000羽前後まで数えるに至った。

これは、地球の温暖化により繁殖地である北極圏の平均気温が上がり、営巣や餌の確保が容易になった事に起因し、その結果、渡来数も増加したものと考えられ、国内の越冬地も年々北上を続けている。

例えば、伊豆沼より北に位置し、これまでは一つの中継地であった秋田県小友沼では、1990年代以降、マガンが越冬するようになり北海道でも1995年からは、日高支庁管内・静内町で越冬するようになった。環境の変化に敏感な野鳥であるマガンがいち早く、環境変化に呼応した結果と考えられている。

この事例は、平成9年(1997)12月1日~11日、京都市で開催された「地球温暖化防止京都会議」に於いて、12月3日、日本野鳥の会とイギリスのバードライフ・インターナショナルが主催するワークショップの席上、温暖化が野生生物に与えている影響の日本唯一の事例として、秋田県小友沼の越冬例とともに報告された。

ともすれマガンの静内町での越冬に関する観察記録が“北海道越冬”のデータとして活用され、静内町でのマガンの越冬が国内のみならず、世界中が環境問題の事例として、注目する結果となった事は、観察をする者としては何よりの励みとなった。

満たす越冬条件

越冬には“採食地”と“ねぐら”の二つの条件が必要であるが、静内町が位置する日高中部地区は、太平洋に面する海洋性気候の影響で、日高支庁管内でも最も降雪量が少なく、気候も温暖であり餌となる牧草の採食が十分可能である。また、ねぐらは、湖や沼はないが、冬期間でも結氷しない2級河川・静内川があり、白鳥たちがねぐらとするのと同様に、河岸、中洲を利用している。

シジュウカラガン

3シーズン目のマガン渡来日と同じ平成10年1月6日、標識シジュウカラガン(069)1羽が静内町に飛来、3月24日までの78日間、静内川河口域で越冬した。

このシジュウカラガンは、平成9年8月1日、ロシアエカルマ島(千島列島)で人工繁殖し放鳥された33羽の1羽であり、他に3羽が3月1日まで、宮城県の伊豆沼近辺で確認されている。

同一日の確認ゆえ、マガンの群れと同一行動で静内町に渡来した可能性もあるが、その後の行動が別々であるなど、その因果関係の立証は難しく、偶然、マガンの渡来日と重なったとも考えられる。

静内町への渡来ルートは不明であるが、越冬中、マガンとは越冬の同一行動をとらず、1月中はオオハクチョウ8羽(成鳥2・幼鳥6羽)のファミリーと同一行動をし、特にオオハクチョウ成鳥2羽がシジュウカラガンの親代わりをしていたが、2月以降は周辺的环境に慣れたのか単独行動をとるようになり、そのまま越冬した。

昭和62年(1987)4月、浜頓別町クッチャ口湖でシジュウカラガン(標識鳥-007)1羽が、コハクチョウと絶えず行動を共にし親代わりをしていた事例が観察されたが、今回とは逆のケース。

なお、静内町でのシジュウカラガンの越冬は、8シーズンを終了して、3シーズン目(平成10年1月6日~平成10年2月22日、48日間)1羽、5シーズン目(平成11年12月21日~平成12年3月22日、93日間)4羽、7シーズン目(平成13年11月29日~平成14年2月22日、87日間)ヒメシジュウカラガン1羽と過去3シーズン、計6羽が越冬している。

亜種ヒメシジュウカラガン

7シーズン目、ヒメシジュウカラガンが北海道で初越冬し、貴重な越冬例となった。ヒメシジュウカラガンは、アラスカ沿岸部で繁殖、アメリカ西海岸で越冬するが、個体数が世界で27万3千羽(2000~2001年度)しかおらず、8種類いるカナダガン(シジュウカラガン)の中で最も体が小さく、ガンの種類の中では個体数も少ない方に属し、日本には極まれにしか渡来しない。

記録としては1979年10月~1980年3月、宮城県伊豆沼で国内では初めて1羽が越冬。5~6年前、新潟県、信濃川流域である大河津分水(分水町・寺泊町)で1羽を確認、昨シーズンの2000~2001年度、10月14日~11月12日間、宮城県伊豆沼周辺で1羽が確認されているなどに留まり、データとして存在するのはごく僅かに過ぎない。

生態~B.c. minima Cackling

1. カナダガンの中で最も小さく、マガモの1.5倍程度の大きさ。
2. 比較的羽ばたきは早い。
3. 甲高い声でキャク、キャクと鳴く。
4. 胸は暗褐色か赤褐色であるが、しばしば紫色味を帯びる。
5. 嘴は短くて太く、その長さは普通32mmを超えることはない。
6. 首の付け根に白い輪が現れることもあるが、あっても非常に細かい不完全であることが多い。
7. 嘴から前傾部にかけての形と頭部は全体的に丸みを帯びている。
8. 左右の頬の白斑はしばしば顎の下でつながっているが、黒い羽毛で分断されていることが多い。
9. カリフォルニアでは、黄色い首環が付いていることがある。ただし、マガンにも同様の首環がついていることがある。

参考~シジュウカラガン(L64cm、W109cm)

平成13年~14年度国内越冬調べ

静内町~1羽(マガン121羽と共に越冬)

平成13年12月2日~平成14年2月22日

石川県片野鴨池~1羽(シジュウカラガン3羽と共に越冬)

課是頁・問是頁

マガンの越冬に関する課題は多々有り、今後、これらの事項をどのように解決するかが大きな問題であるが、一つひとつを粘り強く解決していきたいと考えている。

越冬当初のシーズンは、マガンへの理解と認識が最重要と判断し、積極的に新聞、テレビ等で啓発を行っていたが、アマチュアカメラマン、野次馬等が押しかけ、マガンに対する人為的被害を与えるようになり、結果、マガンが採食地を移動せざるを得なくなった。

現在は、採食地は秘密にしており、人為的な被害を最小限度に抑えるよう配慮している。

採食物が牧草であることから、サラブレッドが放牧されている場所が多く、7シーズン目以降、越冬数が百羽を超えたために群れが飛び出す際に発生する羽音が大きく、その音に神経質で繊細なサラブレッドが驚き走り回り、足首を捻挫する等の事故が発生するようになった。

現在、サラブレッド生産農家ではマガンを見ると追い払うという現象が見受けられるのは残念である。

採食物が牧草であるが、1月中旬から芽を出す牧草の新芽を好んで食するため、農家ではこれを好まず、マガンの姿を見ると爆竹で追い払う等の事象となる。

採食地で大量に排泄する糞が、その土壌にとってプラスになるのか、マイナスになるのかは事例もなく分からない。少なくとも住民にとって、マガン越冬がメリットになるとは思っていない。

個体数が百羽を超えると群れのカウントが双眼鏡、プロミナーを使用する目測では正確な数を把握することが事実上困難となり、その都度、空中へと舞い上った群れを写真で撮影しカウントをしているが、これすらも不確実で手間隙がかかり難儀している。

越冬を観察スタッフが現在、二名であり人材が少なく、一人にかかる負担が大きいため、将来的に保護するための組織を設立する必要がある。

報道機関は、地元の新聞社については越冬が終了するまで報道しないという一定の約束事を守ってもらっているが、テレビ局についてはマナー、ルールや道義的な事項を守らないため、その都度、報道をめぐって対立するなど困惑している。

当たり前のこととは言いながら、マガン越冬に関する保護活動は、日本雁を保護する会の指導、助言があるとはいえ、活動そのものがボランティアに頼っており、調査、啓発等の諸活動費用は個人負担。